

菅季治：「文芸的心理学への試み」序説(その4)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田切, 正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008018

菅季治 ; 「文芸的心理学への試み」序説 (その4)

A Study of Sueharu Kan, a 1940s Philosopher

小田切 正 (Tadashi Odagiri) *

菅の「人生の論理」の執筆は、1943年9月、戦時である。

本論では、菅の論述のもとになっている、キエルケゴールならびにアミエルに焦点をあて、その整理と解釈を試みた。菅がうけたキエルケゴールやアミエルの影響については、これまでも指摘があったが、誤解にもとづくと思われるものがある。

これまでみてきたことからあきらかなように、菅の、豊かな感性のうえに築かれた、哲学的土台は、戦時にあって人間的価値をもった教養をしめていて、その心理の論述も、冷静な観察の眼を生かした考察となっている。とりわけ、絶対的、一元的な哲学の伝統のなかで、他者との自由な、人間的な社交と交際、それによるさまざまな問題の解決につなげていくことを見通した「相互承認論」の展開は、じつにあらたな人間関係の転換点をしめしている。

すべての人が「自由な人」になることが、人間の根本のありかただというのが、菅の哲学の基本である。「自他」「相互承認論」を基礎づけているのが、この人間観であり、その原点となっているのが、人間を縛るものからの自由ということである。その批判のキーワードは、「世間」である。

戦時の全活全般が、「他者抹消」(戦時がこの死生観のうえに築かれていたし、哲学がそうであったことに注目したい)が公の論理とされていただけに、菅がいまわれわれによびかけていることの意味は、時代を超えて重い。

(キーワード ; 菅 季治、世間、キエルケゴール、アミエル)

1 「異端」と「他者」認識の問題

戦時にあって、これに反する哲学、思想、文学や、人間のありかたを追求するということは、非常に困難なことだった。

こうした戦中の、顕著な日本文化の一元的・絶対的な風土のなかで、菅のかかげた、人間関係の基本にかかわる他者認識の意味づけは、のちのちの自他の連帯、市民的交流への道をひらく、先駆のものとして特筆されてよい。

これ自体、自他が両足で立つことによって、生活実践のさまざまな問題が解決されていくの

であって、今日でいう自由な、自発的な小集団から、自治的な能力の形成に至るまで、直接につながった思考(実践)の枠組みの提起となっている。

それでは、菅のいう「他者認識」とは、どのようなものだろうか。「世間」について、菅が、苦渋の思いの体験をいくつも書いているが、最初に、第15号でふれておいた、つぎのエピソードをもういちどとりあげることからはじめよう。

『世間というもののあり方も、やはり論理的である。それは自分を肯定し…また保とうとする。そして自分を否定するものを否定する

* 前北海道教育大学旭川校

のである。(中略) 世間は「変人」「変りもの」を自分と異なり、自分にてむかうもの、自分の目障りになるもの、つまり自分を否定するものとして、否定しようとする。(こういう人間を嘲り、からかう。さらに仲間はずれにする。爪はじきする。一以上について略)

彼の異端性を敏感にかぎつける。(中略) 世間の生き方を超え、世間は怒る。…その人の誤り、うそ、欠陥を探し出し、つくり出す。その人にケチをつけ、泥をなすりつける。その人を引き倒し、引きずりおろす。自分たちに対する否定性を奪いとろうとするのである。』(「人生の論理」の素稿ノートによる。なお第14号資料参照のこと)

こうして、菅のいう「世間」とは、同調や恭順をしめす者には、あたたかくこれをむかひいれるが、ひとたび「変りもの」「異端」としてかぎつけられると、その順応、同一化をさまたげるもの、はばむものとして排除・はげしい他者攻撃をくわえるというものである。

自主性や自立性について、価値がたかくなく、権威性や正統性がいちじるしく、忠誠度のたかい社会にあっては、他者にたいする寛容さがきわめて低い。菅のいう「世間が…自分を否定するものを否定する」というのは、このような、忠誠度を基本とする社会においてである。そしてこの場合、伝統や超越的契機が、ますます世俗化されていくということを通じて、この権威性や正統性への同調化、同一化がいつそうおしすすめられることになる。

そのような自主性や、他者にたいする認識の低さは、菅にしたがえば、おのずから、対立、矛盾をゆるさない、他者欠落、他者不在・他者抹消の論理ということになるだろう。「世間」の論理とはなにか、これをどのような動機をもったものとしてとらえるか、これが菅の哲学的命題というものである。

このような同一化(同調化)では、自分が絶対だということであっても、そうした熱狂さを

冷やして他者をむかひいれるという契機はどこにもないことになるし、自他ともに認めあい、説得によって対立、矛盾をこえていくというダイナミズムは生まれないことになる。必要なことは、自分も主張するが、他者も主張する、そして自他ともに相互にはたらく、という、まさに自由なコミュニケーションがなければならない、という、このことである。

こうした人間どうしの相互のはたらきかけと、相互の認めあいによる、生きかたの修正や補足があって、生活実践が改善されていくものなのである。

この自他の相互承認といった生活スタイルをどうつくりだしていくかが、菅の人間理解の原点にあたるものであり、その哲学の出発点といってよい。

菅によれば、人間、生きるとは、どこまでも「ダイナミッシュな自己同一」をもとめた、自己探求でなければならないとされている。このばあい、自己探求について字義どおりいうなら、自己自身についての探求ということなるが、では、そのいう「自己同一」とはどのようなものか。

結論をさきどりしていうなら、その自己探求とは、たんにそれだけのものではなく、なによりもそうなるための、相互の人間同士のはたらきかけといった、より充実した「人間関係(対人・他者関係、ひろく社会・歴史)の創造と展開のうえにできあがるもの、これが、菅の積極的な主題というべきものである。

菅の、そうした相互承認、他者認識の原則とは、少しながくなるが、つぎのものである。

「他者が任意の他者、不定の他者ではなく、AならAと定っている或るものの他者として、それ自身定っている他者であることを意味する」『或るものが、他のものからちがう、とか、他のものから自分を区別する、とかという事態において、その「他のもの」の方も、同じく或るものからちがひ、或るものから自分を区別するのである。だから、他者

も或るものと等しく、ちがひ区別の主体なのである。』

「他者も区別の主体であることによって…互いに自分を相手から区別し、そのことによっておのおの自己同一を得ることになるのである。」

「たんなる自己同一、はじめからの自己同一などはない。自己同一は、自分の他者との区別、対立を通してのみ成り立つ。しかも自分の他者との区別、対立において、ものは、自分の他者と一つになる。つまり矛盾。だから、自己同一は、矛盾をとおしてこそ成り立つのだ。矛盾を避けて逃げる自己同一ではなく、矛盾に堪え通した自己同一。それがほんとうの自己同一なのだ、と。」

『そのように自分と他者と同一になることは「矛盾」として普通の論理、形式論理がなによりもきらっているものなのである。(中略) これは、ものとそれの他者とが、それ自身において相区別するところの真の内面的な区別が成り立てば、これらのもつともおそれる矛盾に出合うことに気づいているからだ…。』(以上は「哲学の論理」16～20頁 弘文堂版 1950年)

また菅が、つぎのものをあげているのも注目しておきたい。

「ものは、矛盾の尖端にまで押しすすめられてはじめて相互に相手にとって、活動的で生命的になり、そして自分のなかに自己運動及び生命性の内在的脈搏であるところの否定性を得るのである。」「矛盾はすべての運動及び生命性の根本である。」こうして「すべてのものは、それぞれ自分である」というよりも「すべてのものは(はたらきつとめて)それぞれ自分であらうとする」とこそ言うべきであろう。…*dynamisch*な自己同一…「自分自身をはたらきもたらすもの」とか、「自分自身を定立する運動」…真理は自

分自身の生成(自分自身)になることである」

(前掲書 32-33頁 文意をこわさず要約したところがある。傍点は筆者)⁽¹⁾

そのいう「自己同一」とは、以上のように他者との区別と対立・矛盾を「堪え通した」「はたらき」の、成果として得られる、まさに活動そのものとして考えられていたのであり、これについて、さらに「同じ一つのはたらきにおいて…相対立し、相はたらくことによって結びあい、おなじ一つのものになる」と書いている。

「自分」と「他者」とが、こうして、異なつたそれぞれの「はたらき」が尊重され、やがて「同じ一つのもの」になる、という究極が、菅の「他者」認識の根本をささえている。

抑圧と恭順が、「同一化」と「官僚化」と同時併行してすすめられるというのが、「世間」の論理であるが、菅がかかげた以上の、いわば「相互承認論」とは、これとは正反対のベクトルのものであつて、人間の尊厳性と、自由な人間関係のありかた、ならびにその創造的な発展をめざしていたことが、以上からもただちに理解できる。

もう少しいっておこう。

自分と他者の、その区別や矛盾をとおして、はじめてわれわれは、人びとの意見のちがいや、生きかたといったものに出合うものであつて、またそうした対立をとおして、まさに生きかたや実践の検証も、そのダイナミッシュな展望もひらかれてくるものである。菅のいう、たぶんアイディンティティ形成とかたくむすびついた、生活者の論理は、こうして他者のなかで鍛えられるほかないし、そうした生活実践をとおして発展していくものなのである。

そのような、相互の人間信頼のありかたについて、菅はじつに肯定的に、つぎのように書いている。菅の見識というべきものであり、一つの未来展望でもある。

「互いに肯定し合い、したがって助け強め合う人びとの集まりが社会である(注、やや余

白があって) そのように、いろいろの人間が、それぞれ、自分の“本質”にしたがって自己同一を欲望して生きていくのだが、そのさい自分が否定されることが少なければ少ないほど、また肯定されることが多ければ多いほど、それだけ、彼のあり方は、完全になり、その自己同一も確かとなるわけである。したがって、人間として、最も高い自己同一、最も完全なあり方は、すべての人間が、それを肯定して、それに従うようなあり方である。

そして、またこうしたあり方こそ…最も善いあり方であり、最も幸せなあり方であるはずである。(注、このさいごに「すべての人と同じになる」の、鉛筆の書き込みがある)「人生の論理」素稿ノートによる 傍点は筆者)⁽²⁾

2 世間の論理と、人間の内なる世界 —キエルケゴールから(その3)—

菅の「世間」にたいする考察は、一種、社会的忠誠一般にたいする、冷徹さをもった「反抗」といえるものであるが、これについて、いまいちど、キエルケゴールの論述をたどりながら、菅をみることにしよう。

切羽つまった、いやおうなしの現実とむきあっていて、キエルケゴールのいう、人間の“救済”について、みずからに課するということがあったと考えられるし、また人間精神のもつ格別の意味に注目しないではいられなかったにちがいない。

「忠誠」といったスローガンが倫理化すると、「世間」は、どんな小さな精神の自由も、摩擦も葛藤も容赦しないものに変ずる。菅は、キエルケゴールを引いて、この闇のような「世間」について、つぎのように書いている。

「(上略) 自己(注、人間精神、その自由と永遠なるもの)というようなものについて、(もはや)世間の人びとは大騒ぎするということはけっしてないのである。自己というものは…それをもっていることが一寸でも気づかれるならば、これほど危険なことはまたと

ない種類のものである。 真実にもっと危険なこと、および最悪のこと(自分自身を喪失すること)が、世間では何でもなかったかのうにきわめて静かに経過しうるものなのである。これほど静かに済まされる喪失はほかになにもない」(「死に至る病」旧版50-51頁 下線のものは、菅の引用にない部分)

結論をいまいえば、戦時では、どんな自主性も自由も、誇りも感傷趣味でしかないところにまで追いこまれる。“静かに済まされる”この“人間喪失”ほどいたましいものはない、と。また、“自己”をもつということが、“これほど危険なものはまたとない種類のもの”とされるのが、「世間」というものなのである。

キエルケゴールは、永遠者(神)から脱けない命運の、人間の内面や絶望について、するどくえぐってみせてくれたが、菅も、これにならっているというものの、この生をどうディナミッシュに生きるか、このし烈なまでの要求というべきものが、菅の姿勢だったと考えられる。戦争下の生か死か、のパラドックスのなかで、この「最悪なるもの」、この「悲惨なるもの」の、あまりの空しさに、いきどおらないではいられなかったのである。

この頃、菅が遺した告白記録(「人生の論理」素稿ノートにとじられている半切れのメモ、日記ふうの記録)には、「ほんとうの生き方」とはなにか、永遠の「永続きのする」もの、幸福とはなにか(注、日本の哲学史のなかで、幸福とはなにか、について論究したものがあつたか、検討に値するが)をめぐる、菅のもとめてやまない主題が克明につづられている。

「天地は過ぎ逝かん。されどわがロゴスは過ぎ逝くことなし。かなし、かなし」(素稿ノートのトビラにあることば)

「こんな季節は、わたしには地獄の季節だ。悪魔にとりつかれた馬みたいに、枯野をかけめぐっている。つらさ、つかれ」

「人間どう生きるべきか、人間とはどういうものであるか——古くて、しかもあまりにも大きい問いである…自分はもう直ぐ、こうした学問をすることができなくなる…そのほんの少しの、不確かなことでも、ここに書きくわえておくことにする。」

「“こんなの人間の生き方じゃないんだ”と、ぼくたちは思っているんだ、また思っただけじゃない。（中略）夜明け前。しかしやがてほんとうの生き方のみちあふれた世、まことに“文化”のかがやく第一頁が、きつとくる。」

「人間の歴史の歩みのおそさ、ヘーゲルだって、歎いている。はじめなあせり。けれども、だからつくり進める喜びも恵まれるのだ。

チェホフ——いくらか懐疑的に（“決闘” “三人姉妹”）

ゴーリキ——素朴に（“幼年時代”）

レーニン——力強く（“ゴーリキ随筆”）
人間の歴史は、進歩する。」

「“だから”の一つの道は、いままで通り、生命をできるかぎりひきのばしてりゃいいんだ、しかし、もう一つの道はこうだ。“だから”思いきって走り出して、一分でも早く、あの“夜明け”に近くたどりつこう。夜の幕はずいぶんかたく、強いけれど、破れないはずはない…と。」

「このごろ歯車が、眼に浮ぶ。歴史のべらぼうに大きな歯車。何億の人の血を油としてそそいでいる。そいつが重くて、それに大きな岩が妨げているのか…魯迅の言葉を思い出す。“世界の進歩は、たいてい流血によって得られたものだ。”だが、“これと血の数量と関係がない”」

「ぼくは、真理をつかんだ。まだ、うまくシ

ステマティックにしゃべれない。だからおそろしく不安だ。これを人びとに知らせないで、ぼくが死んでしまったら、人間の思想が、まだズーッと同じところに漂っていなければならないことになる。毎日、毎夜、ぼくは貴重な宝を抱きながら、殺人者につけねらわれているみたいだ、きもちだ。

きみに伝えて置く。そうすれば、ぼくのほかに少なくとももう一人、ぼくがつかんだ真理を、人類に語り伝える人がふえるわけだ。

（以下略）」

「（上略）歴史は、人間が完全に人間であろうとつとめる、そのはたらき、人間の“成る”のプロセス、だから人間の道徳は、歴史的であらねばならない。（中略）

1) 人間の真の活動力、あるいは徳は、人間が明らかに、はっきりと（もの、人間、そして歴史を一注）観察する理性自身である。

2) 満足は、理性から生じることができる。また理性から生じる、この満足のみが、存在し得る最高のものである。（注、ここでいう菅の「理性」とは、精神、また「自己同一」をたすけ、広げる「知り考える」認識力だ、と書いている。）そして、それが自由の道なのである。私は、理性にのみ指導される人を、自由の人と呼ぶ。」

緊張を強いるような制約をのりこえて、こうして、その時代の「ネガ」像から「ポジ」像を読みとるということは、容易なことではない。菅は、「地獄の季節」だ、と書いた。その魔のような被縛感をとりはらって、ここにいう人類の“夜明け”のあとにくる進歩と自由な世界の到来を期待をこめて語っているのが、現代へのメッセージともなる、菅の、この「告白記録」といってよい。

「空虚。空虚は、充実を求める。空虚なものは、自分を充ててくれるものを獲得することを求める」という、菅のことばもある。「自分は、

もう直ぐ学問することができなくなる。そのほんの少しの不確かなことも…」と、学問への断ちがたい心情を綴っているのも胸をうつ。日本の敗戦は、この二年ののちのことである。

話をもとにもどそう。

菅は、これまでなんども指摘してきたように、「世間」の否定性に、徹底して注目した。この否定性にうたれ、人間が「自分を失ない」「自分でなくな」るのであり、「存在する意味の消失」さえもたらされる、というのである。だが、このようにいう「世間」の否定性で問われねばならないその本質はなにか、ということになるが、端的にいうなら、“自己”そのもの、人間の“精神性”そのものの否定、これである。キエルケゴールのいう「唯一にして」「最高の個体」である、人間の「内なる世界」をいかに、どのようにつかむか、このダイナミックな展開をそのままとらえることが、もう一つの菅の、自覚的な課題だったのである。

人が絶望するということは、なにかについてのものである。生活のさまざまな局面で人は、思いがけない事態に直面するものである。そうしたとき、その絶望がふかければふかいほど、肉体にささった刺のようにささりこんで、引きぬけないということがある。このことで決定的なのは、心の問題は、精神的なものになっていくにつれて、よりふかくなっていくように、人間は精神（自分として意識する）をもつ存在だということである。人びとが、それぞれ内なる固有の世界（内面）をもつというのも、まさにこのことによるのである。

キエルケゴールは「自分であろうとする意欲」そのものが、精神の特質だといっている。そのばあい、その精神とは、それぞれが「人生はこのために」という、その人にふさわしい「生きがい」といったものをもつものだということである。（「死に至る病」旧版42頁）

なんといっても「世間」では、さまざまな不安や緊張をともなった人間の関係の気づかいのなかで生きるということをする。たえがたい屈

辱、そして誇りが傷つけられるという、そうしたうちがないわけでない。そこで問題は、そうした人間の関係のなかでよくおこりうる障害や困難のなかで、もしその願いや希望がよほど満されることがないなら、いったいなにがひきおこされるか、ということである。

その絶望がいつそうふかく精神的になるにつれて自分に執着するということがおこるし、自分自身に閉じこもるということをもする。これが第一の段階である。

このばあい、外面をとりつくろって、人とうちとけあい従前の、交際を維持するということも、おもては、世間どおりの要求のままでいるということもする。菅は、こうした人について、いくつもエピソードをあげている。

こうして「絶望者」は、自分の内に閉じこもるにつれて、いよいよ自分だけの世界をつくる、人目につかない、まるでなにごともないような外観といったものを捨て身になって作りあげるのである。キエルケゴールに菅が注目したもう一つの着眼点は、この第二段階というべきものである。

そのように、人間の精神のありかたというべきもの、その展開のメカニズムが、かならずしも人目をひくようなものでないとする、われわれが着目しなければならない最大のものは、なにかということになる。

内と外のさまざまな相の、チグハグな相克や分裂といったことから、また直接的「反抗」（あるいは暴力、その種のもの）が噴射する、矛盾のいちばんの内がわにいたるまで、観察者、相談者がたちむかわねばならないのは、こうした人間精神のもつ、その内なる世界（その私なる世界）そのものなのである。

菅がするどく注目したのは、このような人間存在についてであったが、おのずから、このことは、自我形成についての考察（観察）といった問題にもつながっていて、それと同時に、人間関係の内的な構造、そのあり方についての課題をもうかびあがらせてくれている。（以上につ

いては、第15号 2 柔軟で深刻な人間の探求者であってこそキエルケゴールから（その2）を参照のこと）

3 「弱い魂」と、つよい魂

——「アミエルの日記」を手がかりに

いままでキエルケゴールを手がかりにしてきたが、いま少し、その思想の所在をあきらかにしておきたい。菅の「文芸的心理学」を理解するには、パトス的な考察なしではすまされないからである。

「人生の論理」を一読して気づくのは、哲学では、スピノザ、ヘーゲル、キエルケゴールを機縁にした展開のいっぽう、スイスの哲学者、アミエル（ジュネーヴ大学1821-1881）について、論述が非常に多いことである。むろん、これらが、菅のなかで、どのように溶けあって、納得のいくものがつくられたか、の問題があるが、アミエルのもつ意味を菅についてみることは、一つの重要なテーマである。（河野与一訳 「アミエルの日記」 岩波文庫全四冊がある。初版は1935年 参照のこと）⁽³⁾

日記の解説者、ベルナール ブウヴィエによると、「人民主権説」の擁護者とされており、世界・人類の進歩と、そのための平和をすべてにおいて理解しようと努めた人とされている。そのこととならんで、この「日記」でだれもが感じるのは、あたりの変化や人にたいする、こだまするような不安やおそれ、さびしさや人間のよわさといったものが、じつに冷酷なほどに自己観察されていることである。

だが、それだけではない。さらにこの「日記」で注目しなければならないのは、そうした引きこもった、あれこれの欲求や、内がわのよわさといった限界をつき破って、人間の本性の擁護に立ちむかう、生きいきとしたパトスが、その情感を縫ってえがかれていることである。

アミエルについて、菅のつぎの引用がある。

『（上略）自分の孤独を和げてくれる人がなくてみんな否定する、むごい、冷たい人び

とばかりだとしたら、どうしよう。ここで自分と多数者との間に障壁を築き、自分の殻を固くする。（中略）アミエルのつぎのことは、そうした気持に読んでいいと思う。「みんなでしめし合わせてわたしを孤立させ、わたしを小さくかがませて置こうとするようだ、それがわたくしの自尊心を傷つけて、人がなにものをも必要とせず、世間の悪意をものとしめない、という反抗のための反抗に、わたしを引き入れることになりはしないだろうか。悩んでいる心を保護するために傲慢が考えだした甲冑づくめの素気なさは、わたしにも覚えがある。」けれどもそのような魂もうずきだす孤独の痛みに堪えきれないときがある。

「（上略）こういうふうに絶対的に孤独だということは、自然に反するものではないか。いずれにしても、これはわたしの本性に反する。わたしは、社交的な、人なつこい、愛情さえある人間である。誰がそれに気づこう。

（中略）」（アミエル）

しかし誰もこの魂の傷を和げてはくれない。…孤独者が神を信ずるのは、そうした打ちあけ相手のかわりを求めていることだろうか。「（上略）この孤独を神にたいして開くことは、禁じられていない。そこで峻厳な独り言は、対話となる。（アミエル）」（「人生の論理」 98-99頁）

菅について、孤独でさびしくなったとき、アミエルのことばで自分を慰めることがあった、と、「人生の論理」の各節の「孤独」「弱い魂」が、あたかも菅自身のそのままの投影であるかのように、指摘するむきがある。それが、「風変りな」「弱い性格」の人と評する、一つの根拠になっているが、以上の叙述からわかるように、あくまで人間の変化、こころを記録する観察者としての立場が、菅のものだということがわかるにちがいない⁽⁴⁾。アミエルについて、その一方で、菅自身、つよく共感するものがある

ったと考えるし、キエルケゴール以上に、慰められるものがあつたことも、たしかと思われる。

それにしても、菅がアミエルのなににつよくひかれ、共感し、なににつよく慰められることがあつたか、である。

アミエルについても、菅についても、これまで一般にいわれるような、よわさだけの指摘でよいか、ということであり、だいじなことは、アミエルならびに菅について、つよさをもつたその世界の全体をつかむのでなければならない、ということである。

さきの引用でいうなら、「自分と多数者との間」の「障壁」をのりこえるために、どのような問題がたてられ、またそのための積極的な生き方がどううちたてられたのか、が一つの問いになる。「人生の論理」のはじめの一頁に、つぎのアミエルの一文をあげたのも、その意味にほかならない。

「(上略) 成長を止めた者はもう衰えはじめる。途中で抛る者は、断念する。停滞の状態は終局のはじまりで、死のまえぶれになる、おそるべき前兆だ。そこで生きるとはたえず勝っていくこと、われわれの物質的、精神的存在の絶滅、疾病、散佚にたいして自己を肯定していくことである。生きるとは、したがって休みなく欲すること、もしくは毎日に自分の意志をとりなおしていくことである。」

(同書25頁 新版「アミエルの日記」83頁。下線の部分は、新版で補ったもの、第14号参照のこと)

解説者のブウヴィエは、「個人と人類とのあいだの必要欠くべからざる絆」を築くのに悩みぬいたのが、アミエルだと書いているが、国民精神にもえたアミエルがそうだったように、菅のなやみもまた、同じような真情だったにちがいない。くりかえすことはしないが、「死のまえぶれ」のなかで、「生きるとはたえず勝っていくこと」、その必死の抵抗として「生きる」

ことの、とりなおしが、菅の核心のものである。

逆説的ではあるが、「人生の論理」の六は、「弱い魂」である。この章のはじめに

「弱く傷つき易い魂。気弱、内気、小心、細い神経…。論理的に言えば、他から否定され易く、また自分から否定しさえする魂。そのような魂の生態をしらべて見る。」

とある。生態とあるかぎり、菅の眼は、あくまで、観察者の眼である。「消極的な生き方」にたいして、「他人」のあいだ、また「自分」の生き方として、なにを選び「積極的な生き方」とするか、この「弱い魂」をつらぬいている一本の赤い糸が、このような命題である。では、そのようにいう「積極的な生き方」とはどのようなものか、少しながくなるが、ひきつづき文中のものをあげておきたい。

(1)「人間の役目は運命を無理に従えることである。柔弱になってはいけない。男となれ。それが快活を取りもどし、同時に気力と健康を取りもどす方法である。お前の懦弱を愧じろ。(中略) 人間を探せ。話すこと、勢力を及ぼすことを習え。努力のみが人生に味を附ける。自分が男だという気になるには、打克って支配し、創造して顛覆しなければならない」(アミエル)

何故こうかとなさけなくなり

弱い心を何度も叱り

金かりに行く(「人生の論理」128-129頁)

下線の部分は、新版で補った箇所)

(2)「弱い魂は、はじめはじぶんの弱さを認めようとはしないだろう。…かえって、かれは、自分の強さを示すことに努めさえする(中略)けれども偽装は長続きはしない。やがて弱い魂は、ことごとにつまずき倒れる自分の弱さ、もろさを認めなければならなくなる。そして、そのように偽らない自分の魂のありさまをよく見つめるとき、しみじみそれをなげきもし、またはげますきもちも起る…。

“おまえの中では、すべてが減少して、すべてが衰退している。しかしかまうことはな

ない。まだおまえに出来ることは謙遜の念をもって行え、お前の胸をしっかりと定め、お前の生活に規則を与える。…目的をしっかりと立てろ。服従を肯じない自由というものの危険な魅力を知れ”」（傍点は筆者）

人のさまざまなよわさのこうした「観察と分析」をくわえた、そのありかたのさいごにあげているのが、つぎのものであるが、これにはアミエルの、至高な精神にたいする、菅の一つの確信というべきものが提起されているといつてよい。よわい魂とは、この点では、まさにつよい魂のうら返しとしての逆説の意味のものをたぶんにもった、菅の試みであったとも考えられる。

（３）『弱い魂よ、きみに私はこの方法をすすめる。つまり、アミエルと口をそろえていたいのだ。アミエルはいう。

「おまえに必要なのは、意志の単純化と緊張である」と。（注、「アミエルの日記」には「一人ひとりにその仕事がある。われわれはみな、人類の仕事にたずさわり、人類の使命を見出してそれを実現することに努める」とある 同書（一）３４頁）

そしてアミエル自身が、あれだけの量の日記を書くというはたらきによって救われていたとも信じられはしないか。ヴァレリーがドガを描いたような生き方で生きていけばいいのだ。「仕事、殊にデッサンは、彼においては、一つの情熱、修行となり、それ以外の何物も必要としない」ある形而上学、ある倫理学の対象にまでなっていた。…それは、彼に種々の明確な問題をたえまなく供給して…。』

（中略）

何ごとも思うこともなく

いそがしく

暮らせし一日を忘れじと思う（啄木）』

（以上の（２）（３）は、「人生の論理」素稿ノート、ならびに「弱い魂」 「改造文芸」１９５０年５月号による。草美社版（第１５号資料のもの）と

は、ニュアンスが著しくちがう個所がある。）

「人間、真の人間、理想の人間、これが…人びとのモットー、合言葉、集れの号令になるはずだ。…その価値を減少し、束縛し、その本性を傷うものと戦へ」と、アミエルが記している。

（前掲書「日記」（一）１０３頁） 菅の上述の、ストイックなほどの「情熱、修業」（そのための意志の単純化と緊張）が、こうした人間の自由（と平和）の実現のために必要、必須なものと考えられていたにちがいないのである。

（菅について、「弱い魂」の人物評そのままではいいが、戦後史をただしくみるために、これをめぐる解析が必要に思われる。）

なおさいごになったが、アミエルと菅について、次号に再度とりあげることにしたい。

（注）

（１） 以上の、菅のいう「もののほんとうのあり方」については「学徒 菅 季治——その哲学と思想」（「ことば 生活 教育」１９９６年 あけもどろ会編 所収）を参照のこと。これには、とくに菅の「他者」とはなにか、の「哲学の論理」の解析がある。「もののほんとうのあり方」とは、本論という人間の「相互承認論」をさしている。

（２） 菅のいう「自己同一」が、それぞれ力対力の社会観、あいはい世界観におよぶものと指摘する意見がある。これについては、菅についての俗説にすぎないことは、以上に批判的に検討したとおりである。（「語られざる真実」１９５０年 築摩書房の座談会「菅季治の死をめぐって」参照のこと。）

（３） 岩波文庫版の改訳が出されたのは、１９７２年である。初版は、１９３５年。これには訳者、河野与一に寄せた、阿部 能成の「河野君に寄す」がある。これには、つぎの解説がある。「アミエルはドイツ、殊にカント以後のドイツ観念論の影響を受け、フランス系のスイツル人であるがその考え方に於てはドイツ的だといわれている。けれども彼は哲学的精神の旺盛な、自我の横暴な程の強さを見せ

ているこうした体系に、直に合流するには、そこに性格の甚しい相違があったらしい」と。

(4) 前掲「菅季治の死をめぐって」の座談会の参加者の意見を参照のこと。石塚爲雄の「孤独

の救済としての文学」に接したというのがあるし、「デモニッシュなものに対して、非常に警戒して、自分流の哲学の枠を壊すまいとした人」といった評がある。この座談会のそれぞれの意見についてはあらためて批判的な試みをしたいと思っている。